『比較民俗研究』17. 2000／3

書　評

堺　比呂志著
『菅江真澄とアイヌ』

石本　敏也※

本稿では，二つのテーマ設定を行なうことにした。一つは本書のいわゆる「紹介」部分である。各章ごとに大づかみにまとめ，内容紹介を行ないたい。二つ目は本書の「位置づけ」部分である。ここでは先行の諸論文を下地としながら，本書『菅江真澄とアイヌ』の日本民俗学内での位置づけを行ないたい。菅江真澄を底辺に据え，柳田国男とアイヌの関係について若干ながら意見を述べていく。近年出版された『菅江真澄 民俗語彙』には，「アイヌ」や「イナウ」などの項目は設定されていない。しかし，これから見るように，アイヌに関して菅江真澄はかなり多くのことを記述していることがわかる。この差の背景なども考え，これまでの整理を行うのが本稿の目的である。それではまず，本書の構成から示していく。

序章，第一章 アイヌとの出会い，第二章 蝦夷風俗画と真澄の絵，第三章 アイヌモシリ，第四章 闘争，第五章 芸術・音楽・遊戯，第六章 アイヌの文学，第七章 経済伝承，第八章 真澄が見たアイヌの生活，第九章 真澄が見たアイヌの文化，終章，となる。この並びを見ただけでも，その多分野に渡る著者の広い視野が見受けられよう。以下，章ごとに内容を紹介する。

序章では，真澄の長きに渡る旅と，柳田国男によって紹介されてから真澄が多くの人に読まれることになったいきさつがごく簡単に先に触れられる。そしてアイヌ語と日本語が言語学上において近いところがあるのでは，との意見を提示し，方言や時間による言葉の変遷を述べている。そして本書の役割を「本書は，そこに生きてきたアイヌの生活を江戸時代の武士，文人が書き残した記録を通じて，その生活を垣間見て，昔のアイヌの人々の苦労，口惜しさ，悲しさ，腹立だしさ，また反面に自由で，おおらかで，平和な楽しい生活を取捨選択して書いたものである。その実像に迫って，現代と昔の相違点が浮き彫りに表現できれば，幸いと思っている。」(15頁)と，している。このような視覚でこの書は成り立っている。

第一章では五節に分けられ，それぞれ，第一節 真澄は何故に蝦夷地を目指したのか，第二節 小砂子で出会ったアイヌの親子，第三節 青森で描いたアイヌ，第四節 シャモに同化したアイヌ，第五節 少年時に見たアイヌ，となる。まず著者は第一節において真澄の蝦夷地への旅を「蝦夷地の文化，風俗を見聞したかった」と，「世上を騒がせているロシア人の動向を知りたかった」という二点の理由をあげている。そこに工藤平助，佐藤玄六郎などの他資料にも目をくばり，真澄の動きをより浮かび上がらせて見せている。また，第五節ではアイヌがかつてシャモにまじって伊勢参りに行っていたという興味深い報告を真澄から引き出して提示している。

第二章では三節にわかれ，第一節 アイヌ風俗画とは，第二節 アイヌ風俗絵の歴史，第三節 真澄の風俗史，になる。まずアイヌ絵を「アイヌの人々の風俗」を「アイヌ以外の日本人の立場から見て描いたもの」(45頁)とする。次にその価値についてまず歴史的に見，そしてその中に真澄を位置づけている。

第三章においても三節に分け，それぞれ第一節 アイヌの歩んだ道，第二節 社会形態，第三節 親族関係となる。最初にアイヌを「人間」とし，『蝦夷地図式二』や最上徳内の記述などを紹介しながらモシリを「国」また「島」と金田一にそって述べている(87頁)。そして時間軸に沿ってアイヌモシリの崩壊の過程を描く。社会形態では，コタンの諸相，戸数と人口，構成，酋長に分けて述べてある。いずれも菅江真澄を基本に置きながら，様々な史料を扱って膨らみを見せている。親族形態では結婚を中心に据えて，性差や教育にまで幅広く記述してある。

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

第四章では，アイヌ同士の闘争と，アイヌ対倭人の戦いが描かれてある。この章は真澄の図も多く挟まれ，見る行為も含めて真澄が見たアイヌをより考える仕組みがなされているようである。アイヌ同士の戦いでは，「権利の侵害に対してであったり，財物をめぐっての争いが主」（114頁）であったのに対し，後者のそれは「アイヌの存亡をかけた戦い」であり「アイヌモシリの崩壊につながっていった」（141頁）三大戦争とされるものが印象深い。ここではその戦争が，先の崩壊につながる，原因と結果を時間軸に沿って示され，その過程を見せている。アイヌモシリをかけた戦いが徐々にモシリを減少させる結果となり，場所請負人の配下達の存在もあって，アイヌモシリが崩壊していく。総括する語を著者に借りるならば，「アイヌモシリには自由な天地がなくなり，不満がつもったであろうが，幕府は，アイヌの心を和らげる政策をとり，アイヌとは倭人との相互理解が深まる一方，同化政策が浸透していくのである。」（153頁）と言える。

第五章は四節にわかれる。第一節 彫刻と文様，第二節 アイヌの歌舞，第三節 楽器「ムックリ」，第四節 遊戯である。戦いの後の章にこの章がおかれることがやや興味深い。また，ムックリにまるまる一節使われていることが，アイヌとムックリの関係をより強く印象づけている。遊戯には「弓作り」の項があり，アイヌと狩猟との関連を想起させるが，ここでは子供が「まねして作る」の例が示されており（165頁），それは決して遊戯とは捉えられないのではないか，という疑問がやや残る。「目無千鳥」の近江商人との関係から「この中に，今日，大阪の人が入っており，アイヌの子供に，子の遊びが伝わったのではないかと思われる」（170頁）という意見は，同化など，アイヌと日本の関係を知る上で遊びから捉えた貴重な指摘と言えるだろう。

第六章は本書の中では分量の少ない章と言える。しかし，真澄の寛政三年（1791）6月6日の文にある細かい描写を抜き出し，「（語り手の動作，聞くものの態度などのほかに 筆者註）その夜，実際に聞いた物語の内容まで書き入れ，具体的に書いた文章は真澄が始めてではないか」（174頁）と，真澄の関心が決して少なくなかったことを示している。知里幸恵が残した文章をのせ，実際のユーカラを示してこの章の締め括りとしている。

第七章は三節にわかれ，第一節 漁業，第二節 狩猟，第三節 交易となる。それぞれアイヌの様々な技術等が記述されている。最後の交易では，和人との交易の中で古代におけるアイヌと大和朝廷との関係を描き出そうとしている点が興味深い。また，和人のほかに，黒流川（アムール川）下流域の地方を山丹地とし，そこに居住する民族である山丹人をもう一つの視点として持っている。

第八章は，五節あり，第一節 家屋，第二節 衣服，第三節 服飾品，第四節 装身具，第五節 食生活と分かれている。これらを儀礼も含めて著者は史料から提示している。真澄を丹念に読み，様々な記述の中の真澄の発言を列挙している。ここまで読み進めてると，実に多量なアイヌに関しての記述を真澄が行なっていることに，改めて驚かされる。また「文様」の項では「アツシの文様や諸道具の文様には，アイヌ・メノコの血の中に，美を生みだす素質があるのであろう」（260頁）として，その独特の文様からユーカラを引き出している。著者の「正にアツシの文様を目で追って行くうちに，このユーカラの詩のような錯覚となって脳裏をかけめぐっていくのを覚えた」（261頁）という気持ちが伝えられる箇所の一つと言えよう。

第九章は十節と，本書では一番節が多くなっている章である。第一節 挨拶・礼儀，第二節 酒飲み礼法，第三節 イオマンテ（熊送り），第四節 イナウ，第五節 「ペ ウタギ」への感動，第六節文身（刺青），第七節 外国人宣教師が見たアイヌ文化，第八節 真澄はアイヌの変化を望んでいた，第九節 文献に現れたアイヌの真の姿，第十節 英国婦人の見たアイヌ文化，となる。特

に気になるのが第八節であるが，そこでは『かたい袋』『えぞのてぶり』の二つのみから抜き出して真澄の考えを提示する，という形をとっている。「真澄はアイヌの生活の中に，その知恵を見いだし，生活の向上を願っていたものと推察される。」(316頁）と著者は述べるが，むしろ変化を当然のこととして受けとめる真澄の姿もそこに認められると思う。この「変化」を著者は「和人との同化」のように受けとめ，そこに良い意味の価値を認めているようである。それは例えば「アイヌは物を被らず，靴もはかない習慣であるが，近くのコタンに住むアイヌたちは，菅笠で雨を凌ぎ，草鞋をはいているのを見た。東蝦夷地の乙名は，夏の頃，リテンギまたはテギという物を編んで傘にしてかぶっている」(317頁）との例を挙げていることからも考えられる。何を底辺にして「変化」と見るのか。単純に和人との同化のみを良い意味での変化と捉えることは，それまでのアイヌは進歩していないもの，との誤解を招きやすいのではないだろうか。

終章であるが，ここでは「江戸幕府の北方領土意識の欠如や，明治政府の朝鮮への異常なまでの領土意識に反して，樺太への領有権の放棄は不思議である。オホーツク文化，擦文文化を考えるとき，文明は，西からばかり日本に入ってきたのではなく，北方からも入ってきたのである。」(330頁）と，文化レベルにおいてアイヌの位置を著者の意識として提示される。ここで我々は「北」の文化を強烈に意識し，その比較への視野を見いだすことができる。なお，最後に著者は「樺太は，松田伝十郎・間宮林蔵らによる調査・治政が行なわれ，千島は，松前藩から江戸幕府による治政があった土地である。松田・間宮・最上らの探検家の苦労，また樺太・千島に居住し故郷としている日本人の開拓の苦労を，水泡に帰してしまわないためにも，樺太・千島が，日本の領土であることを，ロシアに認めてもらわねばならない」(330頁）と述べこの書を締めている。しかし，これはさきほども筆者が述べたが，日本側にたった意見であり，アイヌ側との距離が感じられる箇所である。探検家，開拓民の苦労と述べるが，その前にアイヌが居住していたし，その点を決して見落とすべきではない。「返す」と言ってもそれは日本でもロシアでもなくアイヌへ返すべきとの意見もある[※1]。著者は最初に「本書は（中略），昔のアイヌの人々の苦労，口惜しさ，悲しさ，腹立だしさ，また反面に自由で，おおらかで，平和な楽しい生活を取捨選択して書いたものである。その実像に迫って，現代と昔の相違点が浮き彫りに表現できれば，幸いと思っている。」(15頁）と述べている。最後の文になって突然「アイヌ」という文字が消え，そこには異質な存在であったはずの「日本」が「原住民」の如く立ち現れるととれてしまうこの文は，これまでの丹念に史料を読み起こしてアイヌの世界を構築してきた著者の態度とは，若干異にする態度であったように思う。

さて，次に本書を，日本民俗学内への位置づけを考えてみたい。本書でも述べられていたように，菅江真澄という人物は柳田国男を通して広められたと考えられる。ではなぜ柳田は菅江真澄を発見し，そしてさらに広めようとしたのか。ここでは後者のほうがより重要であることは言うまでもない。柳田の意図的な思枠が菅江真澄に一致したと考えられないか。以後，この問いを柳田によって捨象されたアイヌを通して考えてみたい。

これまでの研究では，柳田の「山人論」等を基準として柳田の研究を区切る傾向があった。今回ではアイヌに焦点を当てるため，それらは省き，最初に「地名」の考察から考えていくことにする。なぜなら明治・大正期の柳田は，地名を尋ねる際には，必ずと言って良いほどアイヌ語との関連を問題にしているからである。特に興味深いものは，明治43年（1910）に発表した「山民の生活」[※2]であり，そこでは日本人の祖先とアイヌの祖先の居住する地域が重なったため，お互いに雑居し，日本語とアイヌ語に共通の地名が谷あいの湿地に残されているとする考えを述べている。例えば「彼らと雑居すること久し

くなければ決してこれらの名詞を受け伝へる筈がありません。(中略) 蝦夷と日本人が境を接して居つて，長い間平和なるまたは武装的の交渉が絶えないかつたかと思われます。][柳田 (1910) 501頁]などが見られ，これは同時期に発表した「湿地を意味するアイヌ語」※3にも記述されている。この他にも似た記述は見られ昭和2年 (1927) 頃までの柳田の中には，地名の由来をアイヌ語に求める傾向が顕著に現われている。この他，アイヌに関するこの時期までの柳田の記述は，信仰や伝承など多岐に渡る※4。赤坂憲雄は，この時期の柳田を「日本文化の中に残存するアイヌ的な要素を抽出し，その作業を通じて日本文化を基層から照らし出そうとする志向であり，方法＝眼差しであったことは想定して誤りではあるまい。][赤坂 1995 174頁]としている。ところが，昭和3年 (1928) 以降，柳田はそれまでの考えを変化していく。昭和6年 (1931) での「採集と観測」※5では，「よくアイヌ語だの馬来語だのをもつて説明して得々たる人もあるが，それは我々がアイヌ馬来人の後裔であつても，他の言葉がすべて日本語を話している以上は，其引継ぎは想像し難いことであり，仮に久しく彼らと雑居して学んだといふならば，地名は其多くがその大昔のものだといふことになる。][柳田 (1931) 347頁]と，アイヌ語起源に批判を加えている。昭和8年 (1933) の「地名と歴史」※6においても，その態度は一貫している。アイヌ語が伝わってきたことを示すのならば，まずその前に二種の民族が共棲し，一方が他から旧来の地名を教えてもらって，それを採用するだけの交際があったことを示さなければならないし，また以前の名称を以前の土地に付けておいて差し支えが無かったかを確かめる必要がある，とアイヌ語が伝わって今に至った手順も想像しなければならないとするのである。つながるようにして，他のアイヌの信仰や習俗についても記述のはしはしに意見の転回を見ることができる※7。

この柳田の思考の転回の理由として，ここでは二つの視点を述べておきたい。一つは「稲」への視点であり，もう一つは「言語」への視点である。最初の視点に関しては，柳田が「稲」に注目していたことに関連し，それとアイヌを絡めて考えるという視点である。まず柳田の「山民の生活」を見てみたい。

「此国の前の主がアイヌかコロボックルか，国巣は何人種か出雲は同族か異族か。これらは別の問題として，いわゆる天孫種の土着まで日本の山野は原始のままであつたかと申しますと，自分はどうもさうでなからうと思ひますが今の所證拠を得ることが出来ません。(中略) 但し仮に前の居住者も焼畑を作つて居つたとしても，之を我々の祖先が学んだとは申しません。疑いなく祖先はどこかの山国から来た人でありますから，古くから山地の利用法には長じて居たのでせう。唯焼畑を作つて衣食を営むといふことが決して大和民族の特性とは言はれぬばかりです。然らばその新参の我々の祖先が生活の痕跡は何れの点に求めるかと申しますと，自分はそれは稲の栽培耕作だと答へたいのであります。之も一種の仮定説で他日反證が出ぬとも限りませんが，今は先づその仮定の下に山民の生活の他の方面を説明してみようと思ひます。」[柳田 (1931) 499頁]

この文から，柳田は前の種については別問題としながらも，「新参の我々の祖先が生活の痕跡は (中略) 稲の栽培耕作」であると考えていることがわかる。先に柳田がアイヌなどを「我々の祖先」とは別に考えていたことを想起するならば，この時点においてアイヌを稲を持たない種として捉えていることが読み取れる。坪井洋文は「柳田は，焼畑は稲作渡来以前の農耕法であったことを仮説し，新参の大和民族はすでに渡来以前からの焼畑を持っていたが，生活の理想は稲作に求めていた」と述べている[坪井 (1973) 34頁]。北への関心を示した『雪国の春』でも，この態度の一貫性を見ることが出来る。序において「私は暖かい南の方の，ちつとも雪国でない地方の人たちに，この本を読んで貰いたい][

柳田（1928）3頁]と執筆の動機を述べている。そしてその中に『北へ北へと此国を開いた来た民族が，今以て稲を作らずには片時も安心して居られぬといふわけは，稲が故郷の亜熱帯の植物であつて，神の薬も祭りの日の米の飯も，是が最第一の資料だといふばかりでは無つた。冬の長夜を安々と眠り去る為には，なほ其上に年々の新薬と，新籾殻とが沢山に入用であつた時代が，余り久しかつた故に今も其癖が抜けないのである。』[柳田（1928）36頁]と，稲の重視を提唱している。赤坂は「湿地を意味するアイヌ語」をあげ，ここでも柳田がアイヌを稲作とは無縁と捉えていたと指摘している[※8]。そして「稲作の有無によって境界線は引かれたのだ（中略）。列島の北辺の地に埋もれた異文化の掘り起こしは，稲＝日本人の内／外を分かつ境界に微妙なゆらぎを与える」[赤坂 1995 183頁]と見る。柳田はこうしてアイヌをあえて研究の外においた。起源論への批判もこうしてみると理解できそうである。小熊英二は柳田が稲を「日本人」の下からの民俗で統一させるために，頼れる唯一のもとなったことを指摘し，その後にこう続ける。「稲を伴わない「日本人」があってはならず，稲作が輸入文化ではあってはならなかった。そして日本民族は，（中略）稲をたずさえて南島から渡来し土着した民族でなければならず，列島に先住民族がいてはならなかった。もしこの点が崩れれば，国民を単一民俗のもとに連結させるという構想が破綻することは，はっきりしていた。」[小熊 1995 231頁]。稲を底辺にして日本全土を覆う基層文化を想定する柳田にとって，柳田の学問の対象となるべきは，まさにこの「日本人」であったことは言うまでもない。

次に「言語」への視点である。もともと柳田は言語にはかなり意識していたと考えることができる。また，『山の人生』出版以後，雑誌『民族』で連載していた「地名考説」を終了し，『アサヒグラフ』『人類学雑誌』に昭和2年（1927）から「方言と昔」「蝸牛考」が連載されることも興味深い。「地名」の研究から「方言」へと興味の重心が移動されたと考えて良いのではないだろうか。東条操はその点に関して，柳田自身の言葉で幾分示唆している部分をあげている[※9]。『民族』からは昭和3年（1928）の時点ですでに編集からは手を引いていたことがわかるので，まさにこの時期から，柳田の「日本」を題材とした一国民俗学という学問への思考の転回を認めることができよう。つまり起源を求める学問からの変化，否定である[※10]。そして，この「言語」への関心に少なからず関与したのがおそらく大正11～12年（1922～1923）の国際連盟委任統治委員としてのスイスのジュネーブであった南洋諸島の統治形態決定への参加であったろう。柳田自身がのちに語っているように，今日で言うような差別が普通に行なわれていたこの場所は，プライドが大変高かったと思われる柳田自身に大きな苦痛を与えたに違いない[※11]。そこにおいて常に「日本人」「日本語」を欲していたと思われる柳田は，おそらくこれまで以上に「言語」への意識が強くなりその後研究テーマを「地名」から単語の変化，が伴う「方言」へと微妙に重心を変えていく一つの契機になったのではないだろうか。そして「蝸牛考」での方言周圏論の提唱，一国民俗学の方法論へと発展していくのである。このジュネーブ行きによってちっぽけな島国としての日本を痛感し帰国した柳田を，小熊はこのように記述している。「こうして柳田は，大日本帝国のマイノリティである朝鮮やアイヌ，そして山人に対し自覚的でありながら，あえて彼らへの関心を切りすてた。以後の彼は，欧米の驚異にさらされる島国日本の常民を，世界におけるマイノリティとして描き，日本独自の土着文化の防衛と統一を志向してゆくのである」[小熊 1995 220頁]。

さて，ここで次に柳田の菅江真澄についての評価を見ていきたい。柳田の菅江真澄についての初出は大正9年（1920）の「還らざりし人」である。柳田の菅江真澄について書かれたものは全部で12本あり[※12]，そのうち5本が昭和3年から4年（1928～1929）に書かれている。菅江真

澄の発見については，大正7年（1918）の「神道私見」を初めとする論争以後の国学への関心によってのものと考えられているが，特に昭和3年頃から菅江真澄という人を強く評価を加えていったと見ることができる[※13]。ちなみに昭和3年からの5年（1928～1930）の柳田の足跡を追うと，昭和3年に東北旅行と講演，秋田県寺内村における菅江真澄の墓前祭に参列している。4年には『真澄遊覧記』刊行，東北に講義へ出，5年に長野での『真澄遊覧記信濃の部』刊行記念会で「民間伝承論大意」を講演で行なっている。ここからは，東北旅行が一つの契機となって，菅江真澄の発見にもつながっていたと捉えることができよう。しかし，昭和初期以降の柳田こうした熱心な菅江真澄についての記述の中で，アイヌについての記述は皆無と言って良い。それはこれまで見てきたように，柳田の学問としての民俗への思考が強く働いていることは想像に難くないだろう。昭和初期以降の柳田は，これらの菅江真澄の残した日記類は常民の歴史を探るための史料としてのみ位置づけられ，そこに評価が加えられていたと考えることができよう。特に，この菅江真澄を使っての研究法として興味深い記述が，昭和5年（1930）二月に発表された「正月及び鳥」という論文である[※14]。

「今から百三十七年前の，下北半島の習俗は如是であつた。是と現在の田名部大畑大湊の正月生活と，何が変遷しまた何が依然として一致して居るか，さうしてその異なり又同じき理由や如何。」

「他の一方に於て，九州四国の山の村，もしくは岬の片端に古く住む部落にして，各 我が土地のみの奇習異風と認め，原因を祖先の無知蒙昧に託せんとして居た者が，辛うじて此書に由つて膝を拍ち，微笑を禁じ得ぬやうな「偶合」を，発見しようとして居るのである。我々が真澄遊覧記を刊行せんとする本意は，本当は茲に在つたのである。」[柳田（1930）430頁]。この二文に柳田の菅江真澄を使っての研究法が見ることができ，柳田が菅江真澄の日記類に与えた価値を考えることができよう。赤坂は，この二文をこのように分析している。前者からは，「同一地域における習俗の時間的な変遷／一致を検証すること」ができる。「真澄の時代から，何が変わり／何が変わっていないかを探ることによって，習俗が孕む固有の時間＝歴史性が明らかにされるはずだ」[赤坂（1993）373頁]。しかし，柳田の本意はむしろ後者にあると捉えられる。それは引用した最後の一文から伺うことができよう。赤坂は続けて言う。「偶合」，即ち「偶然の一致が見いだされる。そのとき確認されるのは，何か。空間＝地域的な偏差ではなく，かけ離れた地における共通の文化コードの発見を通じて，何が得られるのか。それをひとことでいえば，列島の南／北をつらぬく基層文化の実在証明ということだ」[赤坂（1993）374頁]。柳田は遠方との偶然の一致が時間と関係なく現在において捉えることができることを期待している。例にあげている「九州」という具体的な地名や，その理由を「祖先の無知蒙昧」としていることからも，この読み取りはできよう。つまり柳田にとって同一空間における習俗の時間的変化よりも，例えば青森と九州，という一見全く異なる空間において，その理由を祖先に遡るまで無意識に行なっている現在の習俗の一致，という点を期待しているのである。その期待に込められた意図は何であったか。おそらく，赤坂の言うようにそれは『蝸牛考』の成功で考えることのできた，日本列島を貫く基層文化の再証明である。正月行事をテーマに選択したのも，おそらく正月行事で重要と考えられた「稲」という指標を使って，その信仰に生きる常民の姿を日本列島から均しく見ようとしたため選び出したのではないだろうか[※15]。その二カ月後の昭和5年（1930）4月には，柳田は長野県洗馬村の長興寺で，菅江真澄の記念講演をしている。そこで述べられた内容は，前述したように「民間伝承論大意」という，いわば柳田の「一国民俗学」の方法と体系であった。これが後に昭和7年（1932）1月号の『郷土誌談』に載り，昭和9年（1934）8月に刊行さ

れた『民間伝承論』となるのである。菅江真澄は，以上のような理由からその記述を柳田によって切り取られ，以後柳田の読み方からほとんど読まれることになるのである。柳田は菅江真澄を発見したことについては非常に重要な役割を果たしたといえる。しかし，その読み方，使い方は大変偏った見方であったと言わねばなるまい。逆に言えば，菅江真澄の発見は，柳田の考える一国民俗学の提唱に大変重要な役割を果たしたと言うことができよう。

以上，菅江真澄を底辺に据えて，柳田とアイヌとの関係を見てきた。そこでは柳田の日本民俗学内において捨象されたアイヌの姿を示すことが出来たと思う。本書は，その捨象する契機にもなった菅江真澄の存在を，もう一度読み直す必要性を提唱している。今後，我々はひとまず菅江真澄を通じて，柳田の読み方を離れた思考でもう一度この日記類を見る必要があるのではないだろうか。そこには柳田が昭和初期に捨象した赤坂の言う北の民俗をテーマにした研究が成立するはずである。それは菅江真澄だけではなく，松浦武四郎などの記述類も当然視野に入ってくる。柳田は大正5年（1916）発表の「マタギと云ふ部落」※16で，アイヌ起源の語に対して慎重な態度を見せながらも菅江真澄の「みかべのよろひ」※17を引用している。そこには「蝦夷語」等，後に彼がテーマから外す対象が含まれていた。我々は沖縄を中心とする南からの視点ではなく，アイヌなどを含む北からの視点の可能性の一つとして，菅江真澄を位置づけることができる。柳田が手放したこの思考は，これらの日記類によって新たに組み立てられる可能性を含んでいるのである。本書はその可能性の高さを，改めて我々に提示してくれたように思う。その意味では正に本書は北への視野の出発点の一つと位置づけることが出来よう。

本稿では二つ目のテーマとして本書を通じて，「アイヌ」に視点をおいて，いわゆる昭和初期における柳田の思考の変化を考えてきた。結果，二つの理由をあげ，その先に菅江真澄を使った北からの視野の可能性に触れられたと思われる。勿論，この他にも柳田の見解の変化が様々に論じられているが※18，今回はアイヌに絞ってのみその理由を挙げた。近年アイヌ新法が成立し，アイヌへの関心も高まり始めている。その意味でも本書はその比較への視野を示す契機を与えてくれると言える。これまで，私なりの本書の位置づけを行なってきたが，なにぶん浅学のため十分な読みとりが出来なかった点が多々あると思う。お許しを願う次第である。

【註記】

※1．野村義一　1993　「北方領土は誰のもの？」『別冊宝島ＥＸアイヌの本』

※2．柳田国男　1910　「山民の生活」（『定本』4巻所収）

※3．「湿地を意味するアイヌ語」（『定本』20巻所収）には，

「或る時代において我々の祖先とアイヌの祖とが雑居して居つたこである。而して一方の民族に取つて有用なる土地が，偶々他の一方のためには単純なる邪魔物に過ぎなかつたと言ふことは，恐らくは愈々二者の雑居比隣を容易ならしめた原因であつて，平地を占めた民族の地位が，次第に傾斜地を占めた民族より優勢になつた消息も，後者が壓迫の為に蒙昧なる山人の状態に退歩して行つた趨勢も，この僅かなる共通の言語から想像し得らるのである。」[柳田（1910）109頁]，とある。

また，「峠をヒヤウと云ふこと」（『定本』20館所収）では，「多分アイヌ語のパナワと同一であり，雑居の時代に彼から採用した地名と思ふ」[柳田（1912）61頁]，と述べている。

※4．この考えが見られる論文としては

柳田国男　1910　『石神問答』（『定本』12巻所収）

柳田国男　1912　「峠をヒヤウと云ふこと」

（『定本』20巻所収）
柳田国男 1916「マタギと云ふ部落」
（『定本』27巻所収）
などが挙げられる。それぞれアイヌ文化についての本格的な論文ではないが，アイヌから，異質な文化を捉えようとする思考がそこから伺うことができる。

※5．柳田国男 1931「採集と観測」（『定本』18巻所収）

※6．柳田国男 1934「地名と歴史」（『定本』20巻所収）
「アイヌの地名が沢山に残つて居るという説なども，実は語音の近似を説き，乃至有もせぬ内容をその土地の上に想像したりするだけでは，実はまだ証明にはならなかつたのである。現在の住民を北夷の後裔だと認めない以上は，さうしたアイヌ語が伝わつて今に至つた手順も想像してみなければいけなかつた。それには或る時代二種の民族が共棲し，一方は他から舊来の地名を教へて貰つて，それを採用するだけの交際があつたことを示さなければならぬし，さらに又人の生活がどのように進んでも，以前の名称を以前の土地付けて置いて，差支へが無かつたといふことをも確かめる必要があつたのである。」[柳田（1934）52頁]，とある。
また，「地名と地理」（『定本』7巻所収）では
「アイヌの地名解は（中略）おおよそは意味が明らかになつたと言つて良い。其の御陰にて今では内地の地名までよくわかつて居るのにアイヌ化しようと努める人さへ出て来た。あほらしい話である。」[柳田（1932）32頁]，とある。

※7．この時期の強く主張する論文としては，
柳田国男 1929「人形とオシラ神」（『定本』12巻所収）
1931『音韻事象の考察（1）』（『定本』19巻所収）
1932「盆すぎメドチ談」（『定本』4巻所収）
1932『童話研究二篇』（『定本』8巻所収）
などを挙げることができる。「盆すぎメドチ談」からは，
「（メドチと言う名を）アイヌの方が後に聞いて，少なくとも日本から名を学んだのである」[柳田（1932）353頁]と伝播の逆転を見ることができる。※（）内，石本注による。
また「童話研究二篇」ではオムタロ，シタロの登場するアイヌの昔話から，
「此話はアイヌが近接する日本人から学んだらうといふ想像は，太郎といふ童子の名一つからでも成り立つと思ふ。」[柳田（1932）36頁]と，同じく日本からアイヌへの伝播を述べる。

※8．柳田国男「湿地を意味するアイヌ語」（『定本』20巻所収）
「湿地が何故に生活上に重大な関係があつたかと云へば，第一に稲は栽培しなかつたらうと思はるるアイヌにあつては，交通の大なる障碍である。（中略）第二に日本人の祖先にあつては主食物の生産用地である。」[柳田（1910）106頁]，とある。
また，「文学と土俗の問題」（『対談集』所収）には，
佐藤「そういうふうにして日本諸国を較べ廻って，どの地方が特に人民の生活が豊富だったとか，生活の工夫が特に巧みであったというようなお話はございますか。」
柳田「（中略）痕跡として遺っているのは，そう古い人に沢山の敬意を払わなければならん所はないようですね。どこも同じですね。」
佐藤「日本国中？」
柳田「ただ自然の制約が烈しくてね。例えば島で人口が殖えたというよう

な処は早く苦しみ始めるということはあります。それと反対の処ではいくらか陽気です。まだそう沢山人が来ないという処はありますけれども，それが生活の上に現れて型になってしまうというようなものはありません。やはり日本国中大体同じです。ただ米の出来る処と出来ない処これだけはどうしても違った生活をしなければなりませんから……」と，述べているところも興味深い。[柳田 1936 64 頁]

※対談者は，柳田国男，青野季吉，佐藤信衛である。

なお，日本全国一様と見る見方には，「東北と郷土研究」（『定本』25巻所収）に，「（遠野物語にふれ）それから御互の熱心な比較によつて其の中の一つでも今だ東北特有と云うべきものは無いと考へられるに至り，単に陸中遠野がどこよりも早く注意せられ観察せられたことのみを，異例と認めてよいやうになりました。」[柳田（1930）495 頁]

※（）内石本注による。また後に東北のイタコ，沖縄のユタを並べ，イタコをもって東北に固有の宗教形態があったと見なすわけにはいかない，との意見がある。

また，「比較はいずれの場合でも必要でありますが，主として自国の生活，同胞の文化を観察し解説するこの自国民俗学，英語でナショナルエスノロジーとでも名づくべきもの，特に大切なることが分かつて来るのであります」ともある。[柳田（1930）494 頁]

※9．柳田国男 1916 「方言」（論文ではなく，報告欄である）『郷土研究』4巻1号

東条は，この箇所をあげ「先生の地名の研究は大正初年からで，日本の地名の多様なのに興味をもたれ（中略）地形との関連から地名の発生や分類を考察され，（中略）先生の方言研究の先駆となったのがこの地名研究である。」と述べている。[東条 1962 58 頁]

※10．柳田の起源を問う作業それ自体への批判として「国語史論」（『定本』29巻所収）では，

「殊に厄介なのは，鉄道を作る様になつて其処らを掘り，崩しなどして，矢根石や人骨でも出てくると，すぐアイヌ云々といふ様なことを言ふ。それで地方はアイヌが住み石器・土器を使用してゐたなどと古代のことを云つて居れば，それが歴史だと考へている。実際はこんな古いことを知つていても仕方が無い。また，日本人はアリアン人種でギリシヤから系統を引いてゐる等と考へる人もある。私などから見れば，さういふ人にもう一遍歴史の目的を聞いて見度くなる。国語史にしても，国語の起源を調べるためだと云ふならば，語源を調べて何になるかと訊きたくなる。凡そ我々の生活とは没交渉な事で，語源などは，分かりもせず，また分かつたにしても仕方の無い事である。それを今まで多くの人がやつてゐたのである。」[柳田（1934）164-165 頁]とあり，

また

「比較民俗学の問題」（『定本』30巻所収）では

「今まで起源論に囚はれ過ぎて居た」[柳田（草稿）69頁]との記述等がある。

ほか，1931『郷土研究の将来』（『定本』24巻所収），1934「神送りと人形」（『定本』13巻所収）1935『国史と民俗学』（『定本』24巻所収），がある。

しかし，柳田としても起源論を全面的に否定していたわけではない。

例えば，「鼻歌考」（『定本』17巻所収）では，

「起源論といふ類の学問は，たいていは実

際に何の詮も無いものだが，民謡ではその変遷の跡を辿るために，これを一つの目標とすることはやや便利である。」[柳田 1931 39頁]とあり，作業仮説としては有効であるかのように述べている。

※11. 『故郷七十年』（『定本』別巻3所収））からは，ジュネーブにおいて，
「英仏が憎らしく幅をきかしてゐた」[柳田 1958 392頁]や，
「独言でもいいから思ひ切り日本語で喋つてみたいといふ気がした」[柳田 1958 393頁]
と後年述べている箇所がある。
柳田が自分にとって住みやすい日本をジュネーブでいかに恋しがっていたのか伺うこと ができよう。また，
「連盟で私は日本の不平等な実例を見せつけられたが，この言葉さへ心を打ち明けて話すことができるやうになつてゐれば，かなりの難問題が解決せられるのにと痛感させられたことであつた」[柳田 1958 393頁]ともあり「言語」を重視する体験が語られている。

※12. 柳田の菅江真澄について書かれたものは全部で十二本見ることができる。
1920 11月 「還らざりし人」（『定本』2巻所収）
1927 1月 「菅江真澄の故郷」（『定本』30巻所収）
1927 6月 「をがさべり」（『定本』2巻所収）
1928 1月 「菅江真澄を読む」（『定本』2巻所収）
3月 「霜夜談」（『定本』23巻所収）
1929 1月 「白井秀雄と其著述」（『定本』3巻所収）
8月 「信州と菅江真澄」（『定本』3巻所収）
11月 「遊歴文人のこと」（『定本』3巻所収）
1930 2月 「正月及び鳥」（『定本』3巻所収）
1931 2月 「秋田県と菅江真澄」（『定本』3巻所収）
1939 2月 「民謡と越後」（『定本』17巻所収）
1942 2月 「菅江真澄の旅」（『定本』3巻所収）
（3月 『菅江真澄』刊行）（『定本』3巻所収）
尚，内野吾郎『新国学論の展開』では，10本となっており，「菅江真澄の故郷」「をがさべり」が記述しておらず，赤坂憲雄『漂泊の精神史』では「民謡と越後」が記述されていない。

※13. 内野吾郎は『新国学論の展開』の中で，柳田国男と河野省三とのやりとりを紹介し，この後柳田が近世国学者の業績に目を向け始めたと考えている。その中で，菅江真澄が発見されたのであろう。[内野 1983 161-163頁]

※13. 柳田国男 1930 「正月及び鳥」（『定本』3巻所収）

※14. 柳田は「真澄遊覧記を読む」でも，例として正月行事を選んでいた。
なお，その文中には
「私は将来の東北文化の研究に向かつて此人（菅江真澄）の事業が何程の功績を有するかを説く為に，例を新年習俗の記述に採つたが，勿論是と関係の無い方面にも，他には求められぬ特別の資料は多いのである」[柳田 （1928） 29頁]と述べている。
※ （）内，石本注による。

※15. 前掲（※3）

※16. 内田武志・宮本常一訳 「みかべのよろひ」（『菅江真澄遊覧記』4所収）

※17. 例えば，永池健二は，昭和5年を境に民族芸能に対する柳田の関心が跡絶えてしまうことを述べている[永池 1998.1頁]。永

池はここに柳田が民族芸能研究から民謡研究に移行したことを指摘する。実に興味深い指摘といえるが，ここでは柳田の変化の紹介としてのみとどめておく。

また，平山和彦は『伝承と慣習の論理』において昭和10年代前半における柳田の見解の変化に触れている。第二編第三章では，1935年の「国史と民俗学」(『定本』24巻所収）に見られる柳田の見解は，成年式時の擬制的親子のほうが古く，乳幼児期のオヤは二次的発生としているのに対し，1937年「親方子方」(『定本』15巻所収）では二つの順番の前後は断定できないと変化が見え，1941年の「誕生と成年式」(『定本』15巻所収）では，成年式だけでなく壮年期にも儀礼が繰り返されていることをあげ，古風な田舎ほど早めにこの関係を結ぶ，と乳幼児期のオヤ取りのほうが早いと慎重ではあるが見解が転回していることを指摘している[平山(1974) 246頁-248頁]。又，第二編第六章でも成年式とからめて同様の意見を述べている[平山 (1979) 291頁-292頁]。昭和初期における柳田の見解の変化がここでも見ることができよう。平山はここではその要因を昭和9～11年（1934～1936）年の山村生活調査の実施によっての資料の集積を挙げているが[平山(1974) 248頁§（1979) 292頁]，その他にも文中で述べたジュネーブでの経験のほかに沖縄の発見が大きな位置を占めていようし，その他にも植民地問題など様々考えられよう。なお，平山は第六章において日本の通過儀礼の特殊性を，蛇などが何度も脱皮して生長するように漸進的なものかもしれないとして，比較民俗学的に改めて考察せねばならないと述べている。

参考文献

赤坂憲雄　1993 「漂泊の精神史・菅江真澄の旅」『創造の世界』85号 小学館
（のち，赤坂憲雄 1994 『漂泊の精神史－柳田国男の発生』小学館に所収）

赤坂憲雄　1995 「海の精神史・北の異族」『創造の世界』95・96号 小学館
（なお，この論稿は 赤坂憲雄　1993 「柳田国男／山人とアイヌ文化」（神奈川大学評論編集専門委員会編『歴史解読の視座』(神奈川大学評論叢書第2巻）御茶の水書房所収）を大幅に取り入れている。）

稲　雄次　1995 『菅江真澄 民俗語彙』 岩田書院

内野吾郎　1983 『新国学論の展開』 創林社

内田武志・宮本常一訳　1967「みかべのよろひ」『菅江真澄遊覧記』4 東洋文庫

小熊英二　1995 『単一民族神話の起源』 新曜社

堺比呂志　1997 『菅江真澄とアイヌ』三一書房

東条　操　1962 「柳田先生と方言研究」『定本』月報8 筑摩書房

坪井洋文　1973 「民俗学－一つの視点の定立－」
大場磐雄編『神道考古学講座』第6巻 雄山閣
（のち，1998 『イモと日本人』 未来社所収）

永池健二　1998 「末期を視る眼差し」『柳田国男全集月報』8　筑摩書房

野村義一　1993 「北方領土は誰のもの？」『別冊宝島ＥＸアイヌの本』宝島社

平山和彦　1974 「農漁村における擬制的親族関係」 青山道夫・竹田旦・有地亨・江守五夫・松原治郎編『講座家族6 家族・親族・同族』弘文堂

平山和彦　1979 「成人式と婚礼」五来重・桜井徳太郎・宮田登編
『講座日本の民俗宗教1 神道民俗学』

弘文堂
(のち, 1996 『伝承と慣習の論理』 吉川弘文館 所収)
柳田国男 1910 「山民の生活」『山岳』4巻 3号 (『定本』 4巻所収)
柳田国男 1910 「湿地を意味するアイヌ語」『歴史地理』16巻1号 (『定本』20巻所収)
柳田国男 1910 『石神問答』(『定本』12巻所収)
柳田国男 1912 「峠をヒヤウと云ふこと」『歴史地理』20巻2号 (『定本』20巻所収)
柳田国男 1916 「マタギと云ふ部落」『郷土研究』4巻9号 (『定本』27巻所収)
柳田国男 1916 「方言」(論文ではなく, 報告欄である)
『郷土研究』 4巻1号
柳田国男 1928 「真澄遊覧記を読む」(原稿, 同年2月『雪国の春』掲載)
(『定本』 2巻所収)
柳田国男 1929 「人形とオシラ神」『民俗芸術』2巻4号 (『定本』12巻所収)
柳田国男 1930 「正月及び鳥」『奥の手ぶり』序 (『定本』 3巻所収)
柳田国男 1930 「東北と郷土研究」『東北の土俗』(『定本』25巻所収)
柳田国男 1931 「音韻事象の考察(1)」『方言』1巻1号 (『定本』19巻所収)
柳田国男 1931 「採集と観測」『国語教育』16巻9号 (『定本』18巻所収)
柳田国男 1931-1932 「鼻歌考」『ごぎやう』10/10, 11, 12, 11/1, 2 (『定本』17巻所収)
柳田国男 1932 「盆すぎメドチ談」『奥南新報』19, 22, 25日 (『定本』 4巻所収)
柳田国男 1932 「犬子囃, あくと太郎(原題「童話研究二篇」)」
『旅と伝説』第五年第六号 (『定本』 8巻所収)
柳田国男 1934 「地名と歴史」『愛知教育』559号 (『定本』20巻所収)
柳田国男 1934 「国語史論」『国語学講習録』
(『定本』29巻所収)
柳田国男 1935 「国史と民俗学」『岩波講座日本歴史』(『定本』24巻所収)
柳田国男 1937 「親方子方」『家族制度全集史論篇Ⅲ親子』(『定本』15巻所収)
柳田国男 1940 「文学と土俗の問題」
(のち, 1964 『柳田国男対談集』 筑摩書房 所収)
柳田国男 1941 「社会と子ども(原題「誕生と成年式」)」
『岩波講座倫理学』第七冊 (『定本』15巻所収)
柳田国男 1959 『故郷七十年』(『定本』別巻3所収)
柳田国男 草稿「比較民俗学の問題」(『定本』30巻所収)
※『定本』……『定本柳田国男集』(筑摩書房) のことである。

文中の引用文 () 内の年号は, 初出の年である。『定本』(または後の単行本) の年と区別するため括弧づけにした。そのため, ページ数は便宜的に『定本』(または後の単行本) のものを付している。なお本稿においては赤坂憲雄・内野吾郎・小熊英二の論が大変参考になった。

鍾敬文編
『中国民俗学概論』

余志清※

本書を紹介する前に, 中国民俗学の歴史を簡単に振り返りたいと思う。

中国民俗学は西洋の先進的な人文科学と社会科学の学説の伝播による新思潮の影響のもと, 1919年の五・四新文化運動とともに始まり, 一種の民族意識の覚醒として登場した。初期の民俗活動は長期にわたり「正統文化」に抑圧されていた民主主義思想を発掘し, 民衆の信仰・口

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科